

満州

日ソ戦闘記の体験から

三重県 松本春男

私は昭和十七年の徴集現役兵で、旧満州第三六一二部隊工兵隊要員として、現地入隊のため昭和十八年一月十五日広島集合の命を受け、十七日に引率指揮官により牡丹江省東寧東寧の部隊に入隊しました。

酷寒零下三〇度に及ぶ現地において新兵教育を受け、一期検閲までの間、現代の若者の想像を絶する心労体育の重荷を背負い、無事難関を切り抜け、突破した次第であります。

次年度の昭和十九年一月からは、自分が教育班の助手の任務を受け新兵の教育に当たりました。部隊長は武田定蔵中佐で、私的制裁についてはなるべく穏当にとの通

告もあり、当時の新兵の中には人種の異なった者もあり、軍隊のけじめはそれと知りつつも、できうる限りの温情を旨として教育を実施したつもりであります。

昭和二十年七月、当時部隊本部の兵器係中に、命によりチチハル工兵学校へ派遣教育辞令を受け、直ちに部隊の何人かと一緒に出向いたしました。そのころまでに一期の検閲が終わるや否や兵の大半は中南支方面はもちろん、南方など各方面へ命により転属して行き、本部隊には十八年当時のように兵員はいなくなっておりました。

さてチチハル教育隊において教育が始まるや、日本の軍事情の様子の変動がどうかとか、別段我々の耳には入りませんでした。八月に入ってもまもなく、日ソ開戦となり、学校の命により原隊復帰の命を受けました。

急遽、その体制に移り、ハルピンの駅まで来たら列車が止まったままなかなか走りません。

市街地では、彼方此方で火の手が上がり、昼間の爆撃

で夕方になると空が真っ赤にみえ、一体どういうことになるんだろうと思案するも、ただ啞然と佇むばかり。そのうち、だれかの声で列車が来るぞとのこと、早く乗らなきゃ部隊に帰れない。今にして思えば夜行列車に飛び乗った。それから昼間は敵襲をさけて適宜止まり、二日ぐらいかかって牡丹江駅に夜のとばりが下りるころ着いたが列車は動かない。致し方なく列車から降り駅頭へと進む。

駅前騒然として軍民ともに蜂の巣をたいたような状態だった。すぐ他部隊の将校が来て、「貴様らはどこ

の部隊か、どこへ行くのか」と問いかけてきた。我々はチチハルから原隊のいる東寧へ行くとの訳をいうと「駄目だ」「ここからは列車は進めぬ。あれを見い」。牡丹江の街も火の海に近い、とくに夜間では一層の観がある。それから名も知らぬ他部隊の指揮に移り、東寧は断念する。

(今にして分かったことだが)第五軍の指令部が置かれており翌朝からその一部隊の戦闘要員となったのである。

とくに工兵隊の肩章により、三〇キの黄色爆弾といていたものを個人、個人に持たせた。最前線へ行き、ソ連軍のきそうな道路あるいは小高い丘に待機、迫ってくるソ連兵への肉弾攻撃隊員である。当時は夏盛りの時期、思い出しても息のつまるようなコウリヤン畑の丘の上で、ソ連軍戦車の迫り来るのを待ち受けた。

片方が一本道で前方に連山あり、敵軍の戦車砲と友軍野砲隊の撃ち合いで、ちょうど自分等肉攻隊の場所がその中間に当たっているため、壮絶な撃ち合い合戦で朝から晩まで砲撃の音が山々にこだまして、耳がつん裂けんばかりの暑い一日が思い出されます。

待ちくたびれた夜となり一応戦闘もやみ、その場を引き揚げ兵舎に戻る途中、田を越え畑を通り丘をのぼり、瞬時照明弾が光り、夜が昼になる。途中、どこをどういうふう

に歩いたのか、ただ一目散に散らばりながら、それでもどうにか無事兵舎へ戻れた。無我夢中という言葉が適当と思う。ただ明朝点呼の時、忘れもせぬが神戸芳郎兵長の姿なし。道に迷い敵軍の方へ行ったものか、いまだにその便りはない。

そのような戦闘が連日繰り返され、最初の地名が渡河、次が愛河とか。牡丹江市街地に敵軍がいよいよ迫ってきたのが数日後の八月十日ころだったと思います。仮想訓練と違い、実戦になると何日何時とか、どここの個所など、特に受け身の場合考える暇もなく、軍の命令により進むも引くも言うとおりに。どこでどんな結果が起こるかも神のみぞ知る運命だ。ソ連軍の勢いが強く、牡丹江街のそれぞれの橋を爆破して敵軍の攻め入るを防ぎつつ海林へ退却した時は昼ごろでした。

空軍が遙か空より飛来してきた。助けの神と思いきや低空飛行に移り機関砲が突然パンパンとひびく。この時、ちょうど、海林の駅頭だった。忘れもしない、一瞬間隔に五、六発、うち一発が戦友のラツパ手古市明義上等兵の背中から胸へ貫通し「オイしっかりせよと抱き起こし」と唄の文句どおりにはいかず、自分は停車中の貨車に飛び込み、その難を逃れました。

あの時、溺れるものは葉をもつかむではないが、太陽に照らされ飛行機のソ軍の星のマークがあたかも日の丸に見えたのが実際の感じでした。自分らは戦いという実

戦の場で欲目で誤解したので、果たせるかなそうは問屋が下ろさなかつたということである。

それ以後、軍の命令に基づき退却に続く退却では、もちろん昼は戦闘を、夜は行軍で、途中道なき道が果てしなく続く見知らぬ曠野を、黙々と歩き、走り、戦い敗れて、明日なき命、山越え、谷越え、湿原あるいは川を渡る。顎を出しながら戦友の屍とか、牛馬はもちろん中国人などの屍の群がる中を、ただひたすらに長い道中、苦勞の連続、今日もまた、明日もまただ。それから幾日か経って着いた所が横道河子だった。

八月十六日の夕刻、指令部の命令下る「明日ここで全員ソ連軍と交戦、万一の時は玉砕と決する。心置きなく今夜は甘味品、酒など腹いっぱい食べて、明日の戦闘に備えよ」。

男子の本懐これに優る榮譽なしと、一方、万一の時、敵に屍を見られても悔いのない、恥ずかしくないよう、上から下まで一装用の被服に改める。とにかく今までの人生数々あれど今夜がこの世の見納めだ、お互い男として今まで鍛えられた軍人精神と、若い関東軍の精鋭とし

て、また母国日本の榮譽に賭けてもただ全力投球あるのみとの意気込みでと自分に言い聞かせ、いつしか眠りに入る。

翌日八月十七日起床ラッパで目が覚めて、直ちに手早に朝の諸々の作業を終え、ソ連軍の攻撃を待つ。日は高く昇り九時、十時、一向に横道河子の街に波風は立たぬ。でも我々だけが血気にはやっても仕様がなない。指令部の命を待つよりほかなし。兵舎前の広場に立つ人もなく静かなひと時が経過する。

十時すぎに舎前に將校連の一人二人、やがて担当数の上官の人たちの騒々しい動きを感じる。いよいよ来たるべき時がきた、お互いの顔色赤くなったり青くなったりだ。心に決意を新たに言い聞かせながら、命令を今や遅しと待つ。太陽が燦々と照りつける。鳴くセミの声、吠える犬の遠声、いなく馬声、街の風景、自然界のすべての営みから時を経ずして命が消えてなくなる。これも運命かと再々胸中の動揺隠し切れずといった心境である。集合ラッパの響き高々となる。軍規通りの参謀長の全員舎前に集合の命下る。時に十二時、動から静へ皆の気持

ちが変化する。

司令官だったかどうか我々としては見知らぬ人ばかり、しかも戦闘開始時より実際日々指揮者が交替の結果の今日の成り行きだけに知らぬ存ぜぬのが当然で、しかも敗け戦だけに人心相通じぬものあり、といったわけです。開口一番、「只今より日本国軍隊は停戦状態に入る。

八月十五日に天皇陛下の玉音で戦争は終結した報が入った。以後、ソ連軍がここへ進入してくるが、一切敵対行動をとってはならない。とにかくソ連軍に立ち向かうことのないように注意する。以上である」との通告あり、皆ただ当て外れというか、やれやれというか頭をなぐられて一瞬気絶したような幻覚さえ覚える状態となる。銃を投げ出す者、剣を外す者、悲喜こもごもの一時が過ぎる。

まもなくして戦車の轟音近づき、続いてソ連軍の兵隊が騒々しく我らの方へ近づいてくる。ときに昭和二十年八月十七日の午後だった。

以後、直ちにソ連軍の命により行動開始。歩いて「東京ダモイ・日本へ帰してやる」と、九月中旬まで海林の

収容所生活、以後、旧満州とソ連の国境の綏河を通り、約十日間ぐらい歩いて入ソする。

「東京ダモイ」の言葉にのせられて一難去ってまた一難である。ソ連シベリヤでの重労働が待ち受けていることも知らなかった。本当の苦勞は人に言っても体験してきた者以外には分からない。残酷悲劇の現実が待ち受けていようとはつゆ知らなかった。

「異国の丘」の歌に勝るとも劣らぬ人生の無常さが、あるいは「暁に祈る」など筆舌に尽くしがたい死に勝る苦しみが待っていたのである。

ただ、最後に言いたいことは、いかなることがあっても過去の過ち、戦争だけは起こさぬように念じつつ、私なりの想い、願いを込めながらペンを置きたいと思いません。

旧満州方面実体験記

大阪府 岸川 満

体験談に入る前に徴兵検査、特に私の召集は昭和十九年四月であるので、当時、日本国内における旧軍人の状況または戦果の報告等に遡って話した方が、軍部の兵役義務等の変化が分りやすいと思って、あえて原点よりお話をいたします。これより旧軍人の満州における実体験談ということで録音させて頂きます。

今から遡ること五十二年前の徴兵検査から申し述べます。当時私は台湾に居住しておりまして、ちょうど徴兵検査当時、台湾特有のामीバー赤痢にかかり、一時は徴兵検査が延期かと思いましたが、無理をして本籍地である佐賀県で徴兵検査を受け、前述の病気により丙種合格に結果となりました。

何を隠しましょう。兵隊がいやで、心の中でもう兵役には関係がないと、ヤレヤレとした胸中で、また台湾に